

論文

18 世紀後半のアイランドにおける アイリッシュ・ハープとウェルシュ・ハープの競演

寺本圭佑

Encounters between Irish harp and Welsh harp in the late 18th century Ireland.

Keisuke Teramoto

Welsh harp had been influenced by Irish harp for centuries. From the eighteenth century, however, they got to shift their position. In the 1750s Dublin, Welsh harp and Irish harp struggled for mastery. Finally, Welsh harp overwhelmed Irish harp by the 1780s. Colonial's preference for Welsh harp is one of the indirect factors to terminate the Irish harp tradition.

harp eighteenth century Irish harper Welsh harper music

0. はじめに

ウェルシュ・ハープは何世紀もの間アイランドからの影響を強く受けていた。だが、18 世紀にはついに立場が逆転した。ウェールズのハープ奏者がアイランドを訪れて演奏活動を行っていたのである。時を同じくして、アイリッシュ・ハープは顧みられなくなっていた。小稿は、主に 1750 年代から 1790 年代に焦点をあて、当時アイランドを訪れていたウェールズ人ハープ奏者たちと、アイリッシュ・ハープ奏者との相克について論じる。それにより、ウェルシュ・ハープの流行とアイリッシュ・ハープの衰退の関連を明らかにすることを目的とする。

1. 17 世紀以前のウェールズとアイランド

11 世紀後半に、グリフィズ・アプ・カナン Gruffydd ap Cynan (c.1055-1137) がアイランドからハープ奏者たちを従えて、アングルシー島に侵攻した。この時にアイランドのハープ奏者たちは、ウェールズのハープ音楽を改革したという言い伝えが残されている。当時のウェールズで演奏されていたハープの音色は、アイランドのものとはまったく異なっていた。そのため、アイランド人たちはウェールズのハープを「ミツバチが唸る音」を意味する “teilin” と呼んだ。これが、ウェールズ語でハープを意味する “telyn” の語源になったと考えられている¹。

12 世紀にはウェールズ人聖職者ギラルドゥス・カンブレンシス Giraldus

Cambrensis (c. 1146-c.1223) が「スコットランドとウェールズはアイランドの音楽をまねようとしている。前者はアイランドからその勢力が拡大したため、後者は交流と親近性を持つゆえに」、続けて（アイランドの音楽は）「われわれに馴染み深いブリタニア（ウェールズ）の曲のように長くゆっくりしておらず、実に早く、旋律は甘く快い」とも記しているⁱⁱ。この時代にもまだ両国の音楽の違いは明確に意識されていたのである。

16世紀初頭以前の『ケルズダントの保存』によると、ウェールズのハープ音楽における理論のひとつ「24のメジャー」は、1098年にアイランドのグレンダーロホで作られたと記されている。17世紀初頭に編纂されたハープの楽譜『ロバート・アプ・ヒュー手稿譜』には、「アイランドの奇妙な調弦」や「アイランドの悲しい調弦」と名付けられた調弦法が記されているⁱⁱⁱ。この手稿譜の巻末のレパートリー・リストには「アイランドのカインクに続くクウルム」という曲名が記されている^{iv}。このように17世紀以前のウェールズのハープ音楽は、アイランドからの影響を常に受け続けてきたのである。

16世紀後半から17世紀前半にかけて、金属弦が張られたアイリッシュ・ハープが、イングランドで流行していた。エリザベス1世とジェームズ1世は、コーマック・マクダーモット **Cormack MacDermott (?-1618)** というアイランド人を宮廷ハープ奏者として雇っていた。マクダーモットはロバート・セシルのハープ奏者でもあり、彼に金属弦ハープを教えていた^v。ダニエル・ダフ・オカヒルという盲目のアイランド人ハープ奏者はアン・オブ・デンマークとヘンリエッタ・マリアに仕えており、「女王のハープ奏者」との異名を得ていた。哲学者フランシス・ベーコンは次のような言葉を残している。

「アイリッシュ・ハープとバス・ヴィオールはよく調和し、
ウェルシュ・ハープとアイリッシュ・ハープは調和しない^{vi}」。

11世紀から12世紀と同様に、ウェルシュ・ハープとアイリッシュ・ハープは異質な音色の楽器として認識されていたのである。16世紀末には、ヴィオールやリュートなど、地味で幽玄な音色の楽器が好まれていた。この時期に演奏されていたウェルシュ・ハープは、ブレイ・ハープというミツバチの唸るような騒々しいノイズを発生する楽器だった^{vii}。その耳障りな音色は17世紀の人々の美意識に適合しなかったため、ウェールズのハープ音楽は保護を失い、ついにその伝統は一度途絶えてしまったのである。

2. ウェルシュ・ハーブの黄金時代

だが 17 世紀後半から状況は大きく一変することになる。3 列の弦が張られ、半音階が演奏可能なトリプル・ハーブがウェールズ人の間に取り入れられるようになったのである。最初にトリプル・ハーブを演奏したウェールズ人はチャールズ・エヴァンスといい、チャールズ 2 世の宮廷で雇われていた。すでに 1680 年頃には、ポウイスのトマス・ピーターがトリプル・ハーブを製作している。

18 世紀はウェルシュ・ハーブの全盛期だった。ヘンデルはウィリアム・パウエル William Powell (d.1750) のために有名な《ハーブ協奏曲変ロ長調》(1736)を書いた。リアボンのジョン・パリー John Parry of Ruabon (1710-1782) は盲目にもかかわらず、多くの楽譜出版を行っていた^{viii}。この他にも、アブラム・ウッド Abram Wood (c. 1699-1799)、ウィリアム・オウエンズ William Owens (fl. 1755)、エドワード・ジョーンズ Edward Jones (1752-1824)、ウィリアム・ウィリアムズ William Williams (1759-1828) といったハーブ奏者が活躍していた。この頃、ウェールズのハーブ奏者たちはロンドンだけではなくダブリンにも訪れ、劇場で演奏会を開くようになっていた。

3. 18 世紀アイルランドの音楽状況

アイルランドの 18 世紀は、ウィリアムイト戦争に敗北する 1691 年から幕を開ける。盲目のアイルランド人ハーブ奏者カロラン Turlough O'Carolan (1670-1738) が演奏活動を開始したのは、この終戦の年だった。彼は外国の音楽を取り入れた斬新な作曲を行い、当時の聴衆を熱狂させていた。18 世紀前半には、ダブリンがロンドンに次ぐ音楽消費都市として成長していた。ダブリン城では、クサーやデュブルグなど当代一流の外国人音楽家が雇われ、アイルランド総督のために作曲や演奏活動を行っていた。ダブリン城周辺にはスモック・アレイ劇場やクロウ・ストリート劇場、フィッシュャンブル・ストリート劇場（以後 F-S 劇場と略記）などが軒を連ねていた。当時イタリア語ではなく、誰にでもわかる英語で歌われる「バラッド・オペラ」が大流行していた。1728 年に書かれた《乞食の結婚》というバラッド・オペラには、カロランの曲が用いられている。この時期のダブリンでは、楽譜出版も一般に行われるようになっており、カロランの作品はすでに生前から出版されていた。カロランの登場によってひとつの頂点を極めたアイリッシュ・ハーブは、1738 年のカロランの死後、徐々に衰退の一途をたどることになる。

1742 年に F-S 劇場でヘンデルの《メサイア》が初演された。カロラン以降のハーブ奏者たちは、ヘンデルやコレリなど外国の音楽を好んで演奏するようになった。アイリッシュ・ハーブ独自の古いレパートリーは忘却され、新しい

作曲も行われなくなった。

だがカロランの死後も「アイリッシュ・ハープの世界で最も有名な男」と称されたマーフィー氏というアイリッシュ・ハープ奏者がまだ生きていた。彼は1712年から1753年にかけて、ロンドンやダブリン、そしてヨークで頻繁に演奏会を開いている。カロランの息子ジョンは、父と同じハープ奏者の職業を選び、1748年頃に父の曲集を出版して莫大な収入を得ていた。このように、この時点ではアイリッシュ・ハープは聴衆の寵愛を完全に失っていたわけではない。アイリッシュ・ハープへの共感は、カロランの同時代人が生きていた1750年代頃まで続いていたのである。

4. アイランド人ハープ奏者とウェールズ人ハープ奏者の対決

カロラン以後の世代に、アーサー・オニール Arthur O'Neill (1734?-1816) という盲目のアイランド人ハープ奏者がいた。『アーサー・オニールの回想録』という文書が残されており、18世紀のハープ奏者に関する貴重な情報源となっている。彼は、アイランド人ハープ奏者ジェローム・ディグナン Jerome Duignan (b.1710) と、某ウェールズ人ハープ奏者に関する次のような逸話を残している^{ix}。

「ディグナンは、アイランド議会の議員カーネル・ジョーンズの元に滞在していた。ジョーンズがダブリンを訪れた際、某ウェールズ人ハープ奏者を従えたイングランドの貴族と面識を持った。そのハープ奏者の演奏はとても素晴らしく、イングランド人貴族はジョーンズに「彼以上に素晴らしいハープ演奏を聞いたことがあるか」と尋ねた。彼は「ある」と答え、ディグナンに手紙を送り、西部のリートリム州からダブリンに呼び寄せた。議会が開かれる前に、どちらの演奏家が優れているのか、全議員の間で賭けをすることになった。ディグナンと某ウェールズハープ奏者は、議会でハープ対決を行った。その結果全員一致でディグナンが勝利したという。」

オニールの回想録が書かれたとき、彼は70歳前後であり、必ずしも彼の記憶が正しかったわけではない^x。彼はアイランド人だったため、ディグナンを当然ひいきにしていたはずである。そのため、必ずしも当時のダブリンで、アイリッシュ・ハープがウェルシュ・ハープよりも優れているとみなされていたわけではないだろう。むしろ、当時アイリッシュ・ハープとウェルシュ・ハープのどちらが優れているのかという議論があったことが重要なのである。

5. ウィリアム・オウエンズ

ディグナンと競演したウェールズ人ハープ奏者の名前は知られておらず、彼らが何を演奏していたのかも定かではない。しかし、アイルランドの音楽学者ショーン・ドネリーはこのウェールズ人がウィリアム・オウエンズだったのではないかと示唆している^{xi}。

オウエンズはウェールズの盲目のハープ奏者で、1750年代にダブリンで演奏会を開いていた。彼は、マーフィー氏が消息を絶った1753年からダブリンで演奏活動を行っていた。1753年12月8日から11日、1754年12月29日の『ダブリン・ガゼッタ』紙にオウエンズの演奏会の広告が見られる。彼はキャッスル・マーケットのウェルチ夫人の館で演奏会を開いていた。その後1755年2月27日、1756年4月26日、5月11日にはF-S劇場でも慈善演奏会を開いていた^{xii}。広告によると、オウエンズはリアボンのジョン・パリーに学んだウェルシュ・ハープ奏者であり、独奏だけではなく他の楽器と合奏もしていた^{xiii}。またハープのための曲だけではなく、他の楽器のために書かれたどんな曲でも演奏することができたという。

オウエンズがダブリンで活躍していた1750年代には、まだアイリッシュ・ハープの演奏会も行われていた。たとえば、アーサー・ロウ Arthur Lowe (d. 1757) が1757年2月25日にクロウ・ストリート劇場で、マホニー氏 Mr. Mahony が翌年の1758年2月21日にF-S劇場でアイリッシュ・ハープの演奏会を開いている^{xiv}。また、某レディが1758年4月26日にF-S劇場でアイリッシュ・ハープを演奏している。彼女は《カンバーランド公のマーチ》や《カール12世》というイングランドの曲に加えて、《エイリーン・アルーン》というアイルランドのハープ音楽を演奏していた^{xv}。このように1750年代のダブリンでは、アイリッシュ・ハープとウェルシュ・ハープが劇場でのしを削っていたのである。この時代にオニールが語ったような、優劣の議論を交わし賭けをする風潮があったとしても不自然ではない。当時の状況から考えると、ディグナンと競演したハープ奏者がオウエンズであった可能性は十分に考えられる。

ウェルシュ・ハープとの抗争の後、アイリッシュ・ハープは本格的に衰退しはじめていった。1760年代後半から1810年の間に、筆者が「継承の空白」と呼んでいる時代が訪れるのである。カロラン以後の優れた演奏家エクリン・オカハンも、1757年にはアイルランドを棄てて、スコットランドに長期滞在している。ロウは1757年の7月に死亡し、同年11月には「カロランの作品を演奏していたことで有名だった」エドワード・マコーマック Edward MacCormack (d. 1757) の死亡記事が見られる^{xvi}。1760年代までに、カロランの同時代人が次々と姿を消していた。この頃からアイリッシュ・ハープはほとんど学ばれな

なくなった。たとえ学んだとしても、後世に名を残す職業的演奏家は現れなかったのである^{xvii}。

6. ダブリンのロトゥンダで演奏活動を行っていたエドワード・ジョーンズ

1766年から、ダブリンのロトゥンダで大規模な定期演奏会が開かれるようになった。ロトゥンダとは病院に隣接した円形の大広間であり、ここでの演奏会の収益は病院の経営にも用いられていた。ロトゥンダ演奏会には、バルテレモンやザロモンといった当時のヨーロッパで最も精力的に活動していた音楽家が訪れていた。その中に、ジョーンズ氏というウェールズ人ペダル・ハープ奏者が1775年にロトゥンダで21回の演奏会を開き、21ポンド9シリング6ペンスの支払いを受けている。この人物はジョージ4世の宮廷ハープ奏者エドワード・ジョーンズと同定されている^{xviii}。彼はその後『古代ウェールズのバード音楽と詩の遺産』という曲集を出版した。この本には学術的な序文が付随しており、後世の出版譜に強い影響を与るとともに、古いハープ音楽への関心を集めた。

この曲集が出版された1784年から3年間、中部アイランドのグラナードで、アイリッシュ・ハープのフェスティバルが開かれていた^{xix}。イベントを企画したジェームズ・ダンガンは次のように述べていたという。

「ウェールズのハープは興隆し、スコットランドのバグパイプは興隆し、
哀れなエリンのハープは没落しつつあるのだ^{xx}」。

この一文は、1780年代のアイリッシュ・ハープとウェルシュ・ハープの力関係を、最も端的に表している。1750年代の均衡は崩れてしまい、もはやアイリッシュ・ハープは、ジョーンズらのペダル・ハープに圧倒されていたのである^{xxi}

7. ベルファスト・ハープ・フェスティバルに参加したウェールズ人ハープ奏者

1792年、ベルファスト・ハープ・フェスティバルが行われた。このイベントは、元々フランス革命におけるバスティーユ陥落3周年を祝う式典だった。それに付随してハープ奏者たちの集会が行われ、オルガン奏者エドワード・バンティングによって演奏が採譜されていた。ここには10人のアイリッシュ・ハープ奏者に加えて、ウィリアムズというひとりのウェールズ人ハープ奏者が参加していた。バンティングは彼の演奏について、次のように評価している^{xxii}。

「ひじょうに素晴らしかった。アイリッシュ・ハープの甘く表現豊かな音色と、

力強く勇ましいウェルシュ・ハーブの音色の対比が魅力的で、両国の性格の違いを際立たせていた xxiii」

バンティングの言説は、グリフィズやカンブレシス、ベーコンと呼応している。アイリッシュ・ハーブとウェルシュ・ハーブはそれぞれ独自の特徴を備えており、それは対照的な音色だったために、11世紀から18世紀末に至るまで、いつも比較されてきたのである。18世紀は、ヴィオール族の楽器がヴァイオリン族の明るく派手な音色の楽器にとって代わられた転換期でもあった。ウェルシュ・ハーブの音色は、後者の美意識と結びついていたために、当時の聴衆に広く受け入れられていたのである。

8. アイリッシュ・ハーブの構造を変えたウェルシュ・ハーブ

ウェルシュ・ハーブは、18世紀のアイリッシュ・ハーブの構造にも影響を与えていた痕跡がある。ジェームズ・マクドネルが、女性ハーブ奏者ローズ・ムーニー Rose Mooney (c.1740-c.1798?) のハーブに関して、次のような言説を残している xxiv。

「ローズ・ムーニーの（ハーブ）は、『姉妹』の下に13弦、上に18弦が張られている。（中略）弦は角度のついた、ウェルシュ・ハーブの羽軸のような木のペグによって、固定されている点において異なっている。これのおかげで弦を交換する際に大変便利なのである xxv」。

下線で示した「ウェルシュ・ハーブの羽軸のような木のペグ」というのは、おそらく古いウェルシュ・ハーブのブレイピンを指している xxvi。ブレイピンはノイズを発生させるためだけではなく、蓋のように弦を共鳴胴に固定させるという重要な役割があった。伝統的なアイリッシュ・ハーブは、木のダボを弦にくくり付けて、共鳴胴の裏からつかえのようにして引っかける構造だった。金属弦のブレイ・ハーブは一台も現存していないのだが、ムーニーと同様の楽器は、18世紀のアイランドでは知られていたようである。その証拠に、ブレイピンと思しきアイランド語が存在していた。バンティングは、“Aufhoirshnadhaim”、“Uinaidhin ceangal, or urshnaidhm ceangal” というハーブの専門用語を紹介している。この意味は「弦を固定するための木製のペグ」、「ハーブの金属弦を固定するためのピンあるいはジャック」と説明している xxvii。ウェルシュ・ハーブは、18世紀のアイリッシュ・ハーブの構造にまで影響を与えていたようである。

8. まとめ

17 世紀までは、アイリッシュ・ハープがウェルシュ・ハープに強い影響力を持っていた。しかし、ウェールズにトリプル・ハープがもたらされた 17 世紀後半以降は、ウェルシュ・ハープが台頭するようになった。次第に勢力を増してきたウェルシュ・ハープはアイランドの首都に遠征し、1750 年代にはウェルシュ・ハープとアイリッシュ・ハープと優劣を争う賭けまで行われていた。その後、1770 年代以降はウェルシュ・ハープがアイリッシュ・ハープを圧倒し、1780 年代には完全にウェルシュ・ハープが主導権を握るようになった。この間に、ウェルシュ・ハープは伝統的なアイリッシュ・ハープの構造までも変化させるほどの影響力を及ぼしていた。ウェールズとアイランドのハープ奏者たちは、古くは 11 世紀から互いの音楽を意識し影響を与えあっていた。部分的な変化を受けつつも、両国のハープは独自性を維持し続け、完全に同質化することは決してなかった。18 世紀後半のアイランドにおけるウェルシュ・ハープの流行は、当時の聴衆の趣味を直接反映したものだ。それは、19 世紀後半にアイリッシュ・ハープの伝統が完全に途絶える間接的な要因となっていたのである。

i [O'Curry, 1873.] LECTURE XXXVI.

ii [ギラルドゥス・カンブレンシス 有光秀行訳 1996 年] 207

iii [Harper, 1999] 326 kower gwyddelig dierth, y lleddf gower gwyddyl.

iv [Dart, 1968] 58 Kw[wm] ar gaingk y gwyddyl. Cainc は「枝」を意味し、cwlwm は「結び目」を意味する楽種。

v [Donnelly, 1986]

vi [Bacon, 1854.] 278

vii [寺本 圭佑, 2008 年] この楽器はゴシック・ルネサンス期のヨーロッパで広く演奏されていたが、17 世紀初頭には廃れていた。

viii 彼はトマス・グレイの『バード』という詩のモデルになった人物でもある。

ix [O' Sullivan, 1958/2001.] 319-20

x 彼は、グラナード・ハープフェスティヴァルの開催年や賞金を誤って記憶していた。

xi [Donnelly, 2004] 48 彼は中の中でオウエンズである可能性を示唆しているだけで、この問題については深く触れることを避けている。

xii [Boydell, 1988] 205

xiii 彼の教師パリーもロンドンやダブリンで演奏会を開いていた。

xiv [Donnelly, 1993] 26-27 マホニー氏は 1779 年ころまでは生きていた。

xv [Boydell, 1988] 238

xvi [Boydell, 1988] 230

xvii ウィリアム・カーという 1777 年頃に生まれたアイリッシュ・ハープ奏者がベルファストの集会に参加していた。その後彼は消息を絶ち、職業的ハープ奏者として名を残さなかった。

xviii [Boydell, Rotunda Music in Eighteenth-Century Dublin, 1992] 98

xix [Donnelly, 1993] 28

-
- xx [O' Sullivan, 1958/2001.] 322 エリン Erin はアイルランドの雅名である。
- xxi 18世紀末にはウェールズ人の間にペダル・ハーブが取り入れられるようになり、トリプル・ハーブが衰退しつつあった。
- xxii バンティングは脚注に、彼が優れた演奏家であったことを繰り返しており、演奏の直後に船上で死亡したと記している。ウィリアムズについてこれ以上詳しいことは何もわかっていない。彼が演奏していた楽器や曲目については何も記されていない。ただし、バンティング手稿譜 5/95 に記された《5月29日—ウェールズの曲》という曲がウィリアムズが演奏したものではないかという説がある。曲のタイトルである5月29日はチャールズ2世の誕生日であり、1660年のこの日に王政復古が行われた。《5月29日》は別名《王は再び栄光を取り戻すだろう》というタイトルで知られている。この歌は1647年頃に、マーティン・パーカー (c.1600-c.1656) によってチャールズ1世のために書かれたもので、18世紀のジャコバイトの間で大変流行していた。
- xxiii [Bunting, 1840 / R2002] 64
- xxiv ジェームズ・マクドネル James MacDonnell は子供のころ、アーサー・オニールからハーブを学び、後に医学を学ぶためにスコットランドに渡った。彼はベルファスト・ハーブ・フェスティバルの立案者のひとりだった。
- xxv [Fox, 1911] 281
- xxvi [Hadaway, Jan.1980] 61-62 18世紀には、古いウェルシュ・ハーブであるブレイ・ハーブはウェールズでもほとんど演奏されていなかった。しかし、ウェールズの学者トマス・プライス (1787-1848) は19世紀初頭にディヴィッド・ワトキンという老人からブレイ・ハーブを学んでいた。
- xxvii [Bunting, 1840 / R2002] 20, 36

参考文献

- Bacon, Francis. (1854). *The works of Lord Bacon. With an introductory essay, and a potrait.* London: Bohn.
- Boydell, Brian. (1988) *A Dublin Musical Calendar 1700-1760.* Dublin: Irish Academic Press.
- Boydell, Brian. (1992) *Rotunda Music in Eighteenth-Century Dublin.* Dublin: Irish Academic Press.
- Bunting, Edward. (1840 / R2002) *The Ancient Music of Ireland.* Dublin: Waltons Publishing.
- Donnelly, Sean. (1993) "An Eighteenth Century Harp Medley." *Ceol na hÉireann* No.1, pp.17-31.
- Dart, Thurston. (1974) "Robert ap Huw's Manuscript of Welsh Harp Music (c.1613)" *Galpin Society Journal*, Vol.21, pp.52-65.
- Donnelly, Sean. (2004) "The Famosesst man in the World for the Irish Harp." *Dublin Historical Record* vol. LVII no. 1, pp. 38-49.
- Donnelly, Seán. (1986) "An Irish harper and composer Cormac MacDermott (? – 1618)." *Ceol*, Vol. 8, pp.40-50.

寺本圭佑

「18 世紀後半のアイランドにおけるアイリッシュ・ハープとウェルシュ・ハープの競演」

Donnelly, Seán. (1984) "The Irish Harper in England 1590-1690." *Ceol*, Vol.7, pp. 54-62.

Harper, John. (1999) *Welsh Music History*. Cardiff: University of Wales Press.

Hadaway, Robert. (1980) "The Re-Creation of an Italian Renaissance Harp". *Early Music*. Vol.8, No.1.

O'Sullivan, Donal. (1958/2001) *Carolan: The Life Times and Music of an Irish Harper*. Cork: Ossian.

O'Curry, Eugene. (1873) *On the manners and customs of the ancient Irish : a series of lectures*. New York: Scribner.

ギラルドゥス・カンブレンシス 有光秀行訳 (1996 年) 『アイランド地誌』、青土社。

寺本 圭佑 (2008 年 5 月) 「17 世紀以前のウェールズにおけるハープと音楽」『日本カムライグ研究』第 4 巻第 1 号、頁 6-13、板橋区 日本カムライグ学会。